「世界の誰もが来たくなる大学」へ——

令和3年度

東京大学執行部の顔ぶれ

藤井総長の就任を機に、大学執行部も新たに編成されました。ここでは、理事、執行役、副学長を務める21名の顔ぶれを紹介し、新しく理事に就任した5名の決意をお届けします。藤井総長とともに大学運営を司る新執行部は、東大という大きな船をどんな航海へと導いていくのか。ご期待とご支援をお願いいたします。

執行部について

このほか、２人の監事（吉田民、棚橋元）、５人の副理事（稲垣博明、遠藤勝之、戸張勝之、水上順一、山本貴史）、12人の総長特任補佐（有馬孝尚、内田寛治、小山博史、川﨑雅司、高橋浩之、津本浩平、中尾彰宏、中村宏、矢口祐人、横張真、渡邉聡、割澤伸一）、４人の総長特別参与（沖大幹、喜連川優、坂田一郎、藤原帰一）を含めた役員等が中心になって大学を運営しています。

執行役・副学長

太田邦史

担当｜学術長期構想、デジタル化

理事

今泉柔剛

担当｜事務組織、法務、人事労務、コンプライアンス

理事・副学長

相原博昭

担当｜経営企画、財務、社会連携・産学官協創

理事・副学長

大久保達也

担当｜総務、教育、施設、情報

副学長

吉村 忍

担当｜産学協創推進

執行役・副学長

佐藤岩夫

担当｜ガバナンス改革、利益相反、監査

理事

石井菜穂子

担当｜経営改革特命

総長

藤井輝夫

任期｜令和3年4月1日～令和9年3月31日

理事・副学長

齊藤延人

担当｜研究、懲戒、病院

副学長

丹下 健

担当｜卒業生、地域連携推進

執行役・副学長

佐藤健二

担当｜学術資産活用戦略

副学長

関村直人

担当｜国際特命、Tokyo Forum、Global Advisory Board後継

理事

岩村水樹

担当｜総長ビジョン推進

理事・副学長

林 香里

担当｜国際、ダイバーシティ

理事・副学長

藤垣裕子

担当｜学生支援、入試・高大接続、評価、研究倫理

執行役・副学長

武田 洋幸

担当｜コミュニケーション機能強化推進、入試改革

副学長

坂井修一

担当｜図書館

執行役・副学長

津田 敦

担当｜社会連携推進

執行役・副学長

渡部俊也

担当｜産学連携

副学長

浅見泰司

担当｜オンライン教育、デジタル化推進、キャンパス長期構想、大学総合教育研究センター

副学長

伊藤たかね

担当｜ダイバーシティ教育

副学長

岸 利治

担当｜環境安全、TSCP、総合技術本部

新任理事5名よりひとこと

齊藤延人

大学というコーポレート

これまで五神総長の時代に医学部附属病院長を４年間、医学系研究科長を２年間務めさせていただきました。病院は大学の中でも収益を生み出すわかりやすい現業部門です。特に国立大学法人化を契機にその経営は大きく様変わりし、病院収入は法人化前に比較して倍増し500億円に達しようとしています。

ご存知のようにこのような動きは大学本体にも求められており、時代は大学に単なる教育と研究の場だけではなく、新たな経営体に脱皮することを求めています。例えば製薬会社は、何万という薬の候補の中から候補薬を絞り、少数の薬剤を商品として開発し、利益を求めて企業としての形態を維持するわけですが、この方式は大学には馴染みません。一点集中ではなく、巨大なシンクタンクとして学問の裾野の広がりを維持し、未来に投資するために多様な人材を擁する集団でもあるべきです。一方で、そのような大学だからこそ、社会における役割を果たせる事業もあるはずです。大学がどのようなコーポレートに脱皮していくのか、主に研究の活性化の面から検討を加え、藤井新総長をお支えしたいと思います。

藤垣裕子

経営体としての学問をする場

現在、大学のマネジメントは「運営」から「経営」へと大きく舵を切ろうとしています。その時大事なことは、変革を駆動する大学として、変えなくてはならないものと変えてはいけないものとの境界の見定めです。変えてはいけないことは、人類の知的遺産の継承の側面です。ヒトは他の動物と異なり、文化や教育・学習を通じた世代間情報伝達機構をもちます。大学で学ぶことの人類にとっての意味は、知的遺産の継承の担い手になることであり、大学とは人類が生み出してきた世代間情報伝達装置のうちで重要なものの１つです。

そう考えると、経営体とはいっても、ふつうの企業のように採算の取れない部門は切り捨ててしまうといった施策は決して取ってはならないことがわかります。学問は何のためにあるのか、地球環境と共存しながら人類が存続するために築いてきた知的遺産を次世代にどう引き継ぐかを常に考える必要があります。

経営体としての大学を議論する場である総合科学技術イノベーション会議や産業競争力会議での語彙と、これまで学内で綿々と引き継がれてきた学問の語彙との間のギャップに時に当惑を覚えながら、しかし同時に藤井新総長のとなえる「インクルージョン」「共感」「行動変容」といったSTS（科学技術社会論）にも通じる言葉に希望を抱きながら、「経営体としての学問をする場」をどう構築していくか考えていきたいと思っています。

林香里

バリアフリーでインクルーシブなキャンパスへ

いま、東京大学のキャンパスでは、日本人男性という圧倒的なマジョリティに比して、女性、外国人、障碍のある方などがマイノリティとなっている構図があるように思います。しかし、これらのマイノリティの側から立ち現れてくるさまざまな課題は、よく見るとキャンパスのコミュニティ全体の課題でもあります。それは、多言語化の問題だったり、会議や研究会の風通しのよさや透明性だったり、キャンパスの施設改善やデジタル化の一層の充実だったり――実はこれらはマイノリティのための施策に留まらない、大学構成員全員に資するものです。

この度、私にいただいた職責は、国籍、言語、文化、人種、性別、年齢等の違いにかかわらず、一人ひとりが安心して楽しくキャンパスに集い、存分に才能を発揮できる、文字通りバリアフリーでインクルーシブなキャンパスをつくることだと考えます。そのことはすなわち、東京大学のキャンパスを、発信力があり、グローバルでユニークな革新的コミュニティへと変革することにつながると確信しています。

インクルーシブなキャンパスづくりは、私一人では到底達成できません。卒業生をはじめとするみなさんのご支援・ご協力を仰いでまいります。

岩村水樹

対話を通じ、よりひらかれた世界の東大へ

コロナ禍は、日本そして世界の課題を浮き彫りにし、新たな価値観、社会・経済の仕組み構築に向けた変化を一気に加速させています。私はグーグルで日本及びアジア太平洋地域を担当していますが、こうした変化の局面にあって、より良い世界の構築のために、東京大学が果たすことができる役割は極めて大きいと感じています。東京大学には高い志をもった学生、先生、そして職員が集まっています。この力を日本、そして世界のよりよい変化へとつなげてゆくために、これまで以上に様々なステークホルダーとの対話を通じて変化をリードしてゆくことが求められていると思います。

そのためには東京大学が、多様な人々が集まり、新たなイノベーションや価値観を醸成する場であることが重要です。そしてそのためのカルチャー、なかでも「心理的安全性」が成立する環境を教育、研究、そして大学経営・運営の場でつくってゆくことが求められています。またこうした姿勢を社会や世界に発信し、東京大学を世界のブランドとして確立することと、東京大学に関わるすべての人々が誇りと帰属意識を持つブランドとすることが求められているのではないでしょうか。

東京大学が、世界の課題解決を牽引し、世界の中の日本の新たな位置づけを獲得することに貢献ができる存在となるよう取り組んでまいりたいと思います。

今泉柔剛

今日より良い明日

私の座右の銘は「人生二度なし」です。一度しかない、ただひとつの人生の中で、過去の先人達が長きにわたって受け継いできたものを少しでもより良いものにして未来の世代に残していくことが今を生きる者の役割であり、そのことで自分がこの世に存在し、社会のために仕事をすることの意義付けができるものと考えております。その意味で、今、世界全体が持続可能な未来に向けて共通目標であるSDGsを掲げているという前向きな時代の中で仕事人生を過ごすことができる、ということはとても幸運なことと思います。SDGsの達成年が2030年に設定されている中、これからの10年間はSDGsの達成を目指すことはもちろん、その先の未来に対してあるべき姿を提示していく期間です。そのことを、我が国を代表する本学において、優秀な教職員の皆様方とともに目指していけるのであれば、これ以上に光栄なことはありません。本学に赴任し、藤井総長の下で本学がSDGsの達成に貢献するべく試みていることを知り、非常に嬉しく思いました。そこにおいて、2030年の先の「ポストSDGs」の未来に東大の旗を立てることができるよう、努めてまいりたいと思います。